



No. 4 2

平成30年1月12日

発行 多治見市教育研究所

URL <http://school.city.tajimi.lg.jp/kyoiku/>

本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言 大切にしていること 多治見市立平和中学校 田口 明

今年度平和中学校は、昭和22年4月に開校以来70年を迎えました。そこで、私たちの学校の特色を少し記させていただきます。

まず、校名の「平和」です。太平洋戦争の直後に学校を作るに当たり、地域の人々の平和に関する強い思いから名付けられたと聞いています。（平和町は学校ができた後、町名変更で決まりました）当時卒業した方々が、来校されることがあります。お話を伺うと、戦中とは180度教育が変わり、戸惑うことが多かったそうです。その中でも中学生なりに、これからの日本について、また平和についてみんなで話し合い血気盛んであったと話してみえました。70歳を超える今日も日本の各地で、平和の大切さを訴える活動をしている方もいるそうです。

現在の中学生も平和学習を行っています。学校では、その集大成として3年生の修学旅行で広島に向かいます。平和公園では、学んだことをもとに、その年の3年生ならではの平和宣言を行います。また、原爆ドームを望むテラスで、「被爆ピアノ」をお借りして、「校歌」「平和の鐘」の合唱を行います。3年生になって「平和の鐘」を歌うことが生徒達の伝統で、意義ある活動を創り出しています。毎年お世話になる語り部の方々も楽しみにしてくれているようです。70年を記念して作成したクリアファイルにも、校章の鳩の人文字と共に「平和である以上の幸せはない。」の文字が入っています。

もう一つの特色は、学校の教育目標です。本校は「自立と社会貢献」という目標です。はじめは、「おや!」と思いましたが、今ではとても素敵な

目標だと考えています。

自立とは、とても広い意味がありますが、本校では「周りの人たちのことを考えた言動が自分からできる」と捉え、学校経営の柱としています。生徒会活動や学級活動など「自立」を目指した取り組みが行われています。社会貢献は、身に付けた力で自分以外の人の役に立つことです。校内での様々な活動を通して、人の思いに応えられる自分づくりを行います。また、地域のボランティアにも中学生としての力を発揮します。陶彩の道の清掃や、多治見の花火大会翌朝の清掃を全校で行います。児童館、公民館、青少年育成行事等々、多くの生徒が地域に出かけ自分の力を試しています。地域に支えられている学校として、生徒の心の中に感謝の心を持ち、人を信頼し、自分の力を発揮できる活動が多く行われていることを逞しく感じます。

激動の時代の中ですが、長年大切にされてきた伝統を今の時代にあった形で継承していくことも私たちの学校の誇りとしています。



豊かな心と体を育む ～幼児期にふさわしい保育をめざして～

多治見市立昭和小学校附属幼稚園

10月25日（水）に、多治見市教育委員会指定多治見市教育課題研究発表会を開催した。本園では、昨年度より多治見市の教育課題「子ども一人一人が自己充実感をもつ教育を推進する」を受け、日々の保育における指導援助や環境の構成のあり方を探り、研究を進めてきた。

成果と課題について以下のように報告する。

【研究内容1】人とのつながりを深める指導援助

- ・その子らしさを受容する指導援助
- ・一人一人を認め自己肯定感へつなげる指導援助
- ・聞く力話す力を育む指導援助
- ・思いを伝え合い仲間を意識できるようにする指導援助
- ・共通の目的をもち協同的な遊びへつなげる指導援助

【研究内容2】学びにつながる環境の構成

- ・思わず関わりたくなる環境の創意工夫
- ・わくわくドキドキする感動体験
- ・主体的に活動できる環境の構成
- ・自ら考える力を育む意図的な環境の構成
- ・じっくり遊び込み充実感につながる環境の構成

【研究内容3】育ちを支える連携

- ・一人一人の幼児理解について職員の共通理解
- ・成長を見据えた一人一人の課題の共有
- ・学びや個の育ちを育む地域や関係機関との連携
- ・自立を促す家庭との連携
- ・心と学びをつなぐ小中学校との連携

◀成果○と課題▲▶

- 安心して自分を出せるようになった。
- 気持ちのコントロールをしながら遊ぶ姿が増えた。
- 好奇心、意欲、表現力、探究心が育ち、じっくりと遊びに向かう姿が増えた。
- 生活習慣、意欲、体力などにおいて、子どもの育ちがみられた
- ▲ 子どもを見る確かな目や、育ちを見据えた指導援助や環境の構成など、保育者の力量をさ

らに高めていく。

- ▲ 新教育要領をもとに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を確認し合い、教育課程やアプローチカリキュラムを見直し、保育の質を高めていく。

研究発表会当日の『学級活動』を振り返って

【3歳児】保育者や友達と一緒に遊びを楽しむ子

『なりきって遊ぼう』では、保育者や友達と一緒に、生き物や乗り物の動きを考えながら楽しむことができた。カードを引くことで、わくわくドキドキしたり、好きな絵カードが出て喜んだりしながら、表現遊びが苦手な子も参加することができた。

【4歳児】友達と思いを出し合いながら遊ぶ子

2人組になり、考えや思いを出し合いながら体の部位をくっつける触れ合い遊びに取り組んだ。言葉で伝え合うことは少なかったが、気持ちを合わせ、心を通じ合いながら楽しむことができた。

【5歳児】仲間意識をもち友達と遊びを進める子

3グループに分かれ、『じゃんけんゲーム』を行った。グループでたくさんメダルを集めるための作戦や、誰が攻めるか、誰が守るかなど自分の考えを伝え合いながら遊びを進めることができた。自分のグループの子を応援したり、喜び合ったりする姿もたくさんあり、仲間意識の高まりを感じた。

まとめ

子どもの育ちを確かに捉えることや、一人一人の子どもに応じた環境の構成を考えていくことの積み重ねが、保育者の資質向上につながり、幼児期にふさわしい保育を生み出していく。今後さらに、子ども一人一人の望ましい育ちを支えていけるよう、保育者自身が遊びに主体的に関わりながら、適切な援助や環境づくりをしていきたい。

文部科学省指定 教育研究開発学校（小中連携外国語教育）公表会

多治見市立笠原小学校・笠原中

笠原小学校・中学校では、これまで15年間、文部科学省指定教育研究開発学校として、研究を推進してきた。その中で、今年度の研究の中心である小学校における外国語活動から外国語（英語）科への転換に関わる指導内容と指導方法の在り方について以下のとおり報告する。

【研究主題】

「生き生きとコミュニケーションを図る児童生徒を育てる指導の工夫」
～「笠原型コンテンツ・ベイスト」の手法を中心とした効果的な小中連携の在り方～

【研究内容1】

小中9年間を見通した「外国語（英語）科における目標の段階表」の作成

具体的な指導事項を明確にするため、昨年度作成した「学習到達目標」を、さらに小中9年間を段階的に見通したものになるように細分化し、「外国語（英語）科における目標の段階表」（以下「目標の段階表」という。）として改めた。

これによって、指導に当たる教師が、各学年で目指すべき児童生徒の具体的な姿に加えて、小中9年間を見通して各単元で身に付けさせる力や指導事項についても共通理解して指導を行うことができるようになった。また、この「目標の段階表」を基にCAN-DOリストや振り返りシートを作成することができ、児童の自己評価にも役立てることができた。

【研究内容2】

小学校での習熟・定着を図るための指導の在り方

習熟・定着を図るために、以下の3点を指導の重点とした。

- ・単位時間の導入部分において、既習の言語材料を用いて行うことのできる学習を仕組むこと。

- ・単位時間におけるコミュニケーションを図る活動の中間交流会のもち方を改善すること。
- ・単位時間の終末において、ねらいの達成状況を図るチェックタイムを設定すること。

これらを意識した指導を行うことで、言語材料の習熟・定着を図っていくことができるようになった。

【研究内容3】

小学校外国語（英語）科の評価内容と評価方法の追究

小中9年間を見通して作成した「目標の段階表」を基に、各単元の評価規準の見直しを図った。また、それぞれの観点について評価の場と方法を明らかにした。

各種テストや単位時間内の行動観察を通じた評価を行う中で、特に今年度改善を図ったのがパフォーマンステストである。年間4回のうち第1～3回は直前に学習した単元で行った活動形式を用い、身に付けた態度や能力を評価することとした。また、長期の定着状況を測るために、学年のまとめである第4回は、1年間で学習した内容をできる限り網羅して作成した。

《成果と課題》

- 習熟・定着を図る指導を行ったことで『英検 Jr.』での正答率が『語句』『会話』『文章』『文字』の全ての分野でH26年度と比べ、大きく上昇した。
- 評価の観点を焦点化し明確にしたことで、指導すべき内容がはっきりとした。これにより、全教員での共通理解がより確かなものとなった。
- 評定による評価を行うため各種テストや授業内での行動観察を行っているが、評価材料の少なさや問題の難易度のかたより等、客観性・信頼性の観点から今後に向けての課題が浮かび上がってきた。

生き生きと学び続ける子を求めて

～「できた」「わかった」を実感する授業過程の工夫を通して～

多治見市立池田小学校

11月8日（水）に、多治見市教育課題研究発表会を行い、見出しの研究テーマのもと、授業公開をすることができました。

当日の研究会において、参会された先生方からのご意見を踏まえ、公開授業における成果と課題を報告します。

「できた」「わかった」を実感する

授業過程の工夫について

（○は成果、●は改善点）

1 コンパクト・インパクトのある導入

○外国語活動では、教師の作ったTシャツを提示したことで、「自分も作りたい」という思いをもたせることができた。

○算数科では、日常にあり得る場面を想定した問題にすることで、題意をつかんで立式のイメージをもつことができた。

○図画工作科では、児童の課題意識に合わせて、二つの資料を提示することで、課題解決の糸口を見いだすことにつながった。

●導入では、コンパクト・インパクトにこだわり過ぎて、児童にとっての必然性が弱くならないような工夫が必要である。

2 じっくり・たっぷり考えることができる展開

○国語科では、例文を提示したことにより、学習活動の内容と評価の観点が明確になった。このため、児童は、落ち着いてじっくり学習活動に取り組むことができ、相互評価活動もしっかりと行うことができた。

○特別支援では、使うとよい言葉が視覚的に提示されていたことが効果的な支援だった。また、児童の動きを iPad で記録し、視覚的・客観的に見たことで、よい点と改善点を、児童が振り返りやすくなった。

○音楽科では、声の強さを見える化した表があり、課題追究の手段がはっきりしていて、じっくり、たっぷり追求できた。

○社会科では、写真資料・文書資料・年表など、種類の違う資料があったため、どの児童も考えをもつことができた。また、問い返しに反応したり、資料と資料をつないだり、自分の今の生活とおきかえたりして発言できる児童の姿が多く見られた。

●課題を追究していく活動を多様化したり、多様な意見の集約の仕方を考えたりするなど、展開過程での工夫がさらに必要である。

3 はっきり・すっきりする終末

○特別支援では、表彰状を使って評価をするという工夫によって、児童が達成感をもつことができた。

○国語科では、児童同士の相互評価の位置付けが、児童の自己充実感と次時への学習意欲を高めた。

○図画工作科では、本時大きく作品が変容した児童が、その作品を全体に広められたことで、自己充実感をもつことができた。

●どの教科でも、全ての児童が「できた」「わかった」を実感するために、教師が終末での姿（動き・作品・ノートの記事など）をさらに具体的にイメージする必要がある。

先生方のご意見を参考にさせていただき、児童が生き生きと学び続け、力を付けていくことができるような指導や授業改善を行っていきたくと思っています。

ありがとうございました。

ユニバーサルデザインと主体的な協働学習の融合
 ~できる・わかる喜びを味わい、自信をもつことができる生徒の育成~
 多治見市立陶都中学校

多治見市教育課題研究発表会を10月13日(金)に終えることができました。成果と課題について以下のように報告する。

1 成果

【研究内容1】
人的環境のユニバーサルデザインから

①意図的なグループ編成

- ・実験において解剖・写真・記録などの役割を意図的に設けたことで、スムーズに実験を進めることができた。(理科)

②学習効果を高めるための集団育成

- ・習熟度や問題の理解度に応じて、任意の人数での交流を入れたことで、生徒は学習の楽しさを実感しながら主体的な協働学習ができた。(数学科)
- ・生徒の追究の様子から理解レベルを見届け、適切な学び合いを促すことができた。(社会科)

【研究内容2】
授業環境のユニバーサルデザインから

①出口の姿まで見通すことのできる

明確な学習課題の提示

- ・課題について、3つのキーワードを基にまとめることで、調べることが明確になっていた。(保健体育科)

②主体的な協働学習を促す教師の出場の限定

- ・教師が深めの発問に出場を限定し、構造的な板書を心がけたことで、生徒中心の授業が展開された。(国語科)
- ・文法のポイントを的確に示したり、生徒とのやりとりから既習表現に気付くことができるようにしたりする工夫ができた。(英語科)
- ・教師の説明を短く行ったり、生徒の発言を気長に待ったりすることで、生徒が主体的に活動していた。(特別支援教育)

【研究内容3】
教育環境のユニバーサルデザインから

①学びやすい環境づくり

- ・「美の要素」に気付くことのできる資料や完成した提示作品によって、生徒の意欲を高めることができた。(美術科)
- ・大型テレビで作業の手順を拡大して示したことで、本時行う活動を生徒はイメージすることができた。(技術・家庭科)

②学びを深める環境づくり

- ・楽譜に言葉・記号・絵などを使って、注意やアドバイスを書き込むことで正確に旋律を覚えることができた。(音楽科)

【総括】

- ・生徒が話すことに慣れてきており、形式的ではなく、自然な対話ができるようになってきている。
- ・どの授業も、学習内容がよく分かるはつきりとした学習課題であった。

2 今後の課題

- ・iPadで実態を把握して、グループ編成の仕方を工夫し、授業に活かしていく。
- ・生徒が「追究したい!」と思える好奇心をかき立てるような課題(～か?となるような)や、生活の中の疑問と結び付けた必然性のある課題にしていく。
- ・深い学び合いになるように発表会で終わらず、やりとりがもっと自由な感じで続くような出口を工夫する。
- ・交流の意図をはっきりとさせ、教師の出場や見届けの仕方を工夫していく。
- ・iPadをどこでどのように使うかを見極め、効果的に使っていく。

たじみ子どもの権利の日

多治見市では、平成15年に「多治見市子どもの権利に関する条例」を制定し、子どもの権利について広く知ってもらうため、国際連合で「子どもの権利条約」が採択された11月20日を「たじみ子どもの権利の日」としました。

平成29年度からは「多治見市子どもの権利に関する推進計画」の第3次がスタートしました。その計画の中で基本理念や目標などが次のように示されています。



【基本理念】

子どもの権利を保障するまちづくり

- ・子ども一人ひとりの違いを大切にし個性として尊重するまち
- ・子どもが安心して自分らしく生きることができるまち
- ・お互いを尊重し、共に支え合うまち
- ・子どもが多治見の今と未来をつくっていくことのできるまち
- ・平和と環境を大切にし、世界とつながっていくまち

【目標】

自己肯定感（自分自身を大切に思える気持ち）の向上

【施策の方向】

- 1 子どもの生命、安全を守る支援・救済体制の充実
- 2 子どもの居場所づくりと意見表明・参加の促進
- 3 子どもの権利に関する意識の育成・向上

施策の方向3により、今年度も各学校で「たじみ子どもの権利」に関する様々な取組が行われました。

各学校では、教育研究所のHPに掲載されている指導案を活用した学活の授業の他に、思いやりなどの価値項目で道徳の授業を実施したり、朝の会や帰りの会、全校放送や全校集会、学校報等で「たじみ子どもの権利の日」を紹介したりしました。

中には、教室の黒板に

- ㊦…たのしくらす
- ㊧…じぶんをたいせつにする
- ㊨…みんなとなかよくする

と書いて、継続的に様々な活動と関わらせて子どもに話をしたり、全校で道徳の授業参観を行ったりした小学校もありました。

また、授業の中で、SOSミニレターや多治見市相談窓口等を紹介し、悩みを一人で抱え込まなくてよいことを伝えた中学校もありました。

ひびきあいの日

岐阜県の人権教育においては、平成18年度から、各園・学校の実態、地域の実情を踏まえつつ、人権教育における行動力の育成を主たる目的とする取組「ひびきあいの日」を設け、人権問題に対する実践的態度の育成を図るとともに、人権感覚を高め、同和問題をはじめとする様々な人権課題の解決を目指しています。

多治見市内の幼稚園、小学校、中学校でも全ての学校でひびきあいの日の様々な取組を行いました。

【幼稚園の取組 例】

- 園だよりの発行
- 小・中学生との交流：運動会・生活科等
- 地域の特別老人福祉施設との交流：プレゼント
 - ・歌・飾り・肩たたき等
- 地域の老人会との交流：さつまいもの栽培・焼き芋大会等
- 人権ワークショップグループによる講座：
 - ・園児向け・保護者向けの講座等



【小学校の取組 例】

- 学校だよりの発行
- 挨拶運動
- 道徳や学活の授業公開
- 掲示：よいこと見つけ・標語等
- 異学年との交流：ペア遊び・掃除等
- 委員会活動：あたたかい言葉・花の栽培等
- 人権に関する講演：子ども向け・職員向け
- 全校集会・放送：あたたかい言葉・命の教育
- 標語の作成：家族で人権標語作成等
- 地域との連携・交流：福祉施設への寄付等
- 職員研修



【中学校の取組 例】

- 道徳の授業
- 講演会
- 全校集会
- いじめ防止標語
- 委員会活動：よいこと見つけ
 - ・アルミ缶回収等
- 学校報・学級通信の発行
- 命について考える日の設定
- 掲示：よいこと見つけ・人権標語等
- 職員研修

